

田辺元が西田家の苦難を「旧約のヨブの一家のようだ」^{※1}と云ったように、この頃の西田の私生活は壮絶であった。1919年の9月に妻、寿美が脳溢血で倒れ寝たきりとなり、その1年後1920年長男謙が突然の発熱の後23歳という若さで亡くなっている。不幸はまだ続き翌1921年5月には四女友子と六女梅子がチフスに感染し、特に友子はこの後も長期の療養を余儀なくされる。

担架にて行きしその日より帰らぬものとなりし我が子(※2)

妻も病み子等亦病みて我が宿は夏草のみぞ生い繁りぬる

この頃の家生活の苦悩をよく西田は歌に詠んでいる。最も多く詠んだといってもいいと思う。またこの時期の西田は非常に多作である。『善の研究』の前に初めて自身の子の死を経験した時と同じように、彼が実生活の苦悩を経験する時、それは新たな思想の開花する時であるといつてよい。この頃のことを大拙は「彼が内面的生活に於て最も記念すべき年は大正12年(1923)彼が53の春を迎えたときであろう。」^{※3}といっている。その年の日記にはその冒頭以下のように述べられている。

人生は一巻の書に似ている。愚者は軽々しく頁をめくるが、賢者は思慮をこめてこれを読む。読み得るのはただ一度のみと知るがゆえ(※4)

この頃療養中の友子が「終身びつことなるか狂となるかの岐路に立って居る我子の行く末を思ふも寸時も心のくもりはれる時はない」という状況になり、「友便所に入る引き出せば血所々にながる」とある。メランコリックな精神の緊張状態が推察される。西田の日記に「Don't smoke」「禁煙」の文字が頻出するのもこの頃だ。それはかつて『善の研究』が生まれる前の日記に頻出する「打座する」に似通っている。「禁煙」の文字は再三にわたり繰り返され、時には朱記され異様な感じすら与える。このような西田の性格について小林氏は「なければならぬの性格」つまり「強迫性格」としてしている。

私はこれを西田の生涯を通じての強迫性格と見る。

このタイプの間人は、一度あることに思い至ったら、それを脳裏から排除することが出来ない。(※5)

おそらくこの指摘は西田の気質の一面を正確に示している。強迫神経症的な気質と子供の死という耐え難い苦しみは、この時の西田を再び自己の奥底の果てのない暗闇に導いたのであろうか。しかし一転、1923年の日記に以下の様にある。

From this very day I die to the world I live only in my philosophy

Alles geopfert alles geopfert tiefes einflussreiches Erlebnis

(今日この日から世界に死し、我哲学のみに生きる。全てが捧げられた。全てが捧げられた奥深い影響力をもった経験)(※6)

「奥深い影響力を持った経験」それはどのような経験であったのだろうか。

様々な宗教体験を集めたウィリアムジェームズの「宗教体験の諸相」や網島梁川の「余が見神の実験」などに深い興味を持っていた西田にとって「古人刻苦光明必盛大」という心境であったか。自己の滅却と神との合一のようなものだったのかもしれない。それは前述したような西田の気質による一種病的な事柄による物であったかかもしれない。実際、様々な精神的な病によってそのような現象をみることもあるという。しかし、所謂宗教家や神秘家の告白する体験はどれも驚くほど似通っている。^(※7)もしかしたらそれは高度に発達した脳が人類にもたらした実存的な苦しみから逃れるための意識の変性であったのではないか。たとえ今日の病が癒えたとしてもどんなにか懸命に日々を生きても、いつか例外なくすべての物が終わるという事実を前に、人は生きるために「神」を見なければならない。人間のみ「神」を持つ。西田の「奥深い影響力を持った経験」とは彼が自身を苦しみから救うために作り上げた神のような光だったのかもしれない。

しかし、暗闇ではその光が一層強く感じられるようにその哀しみの底に深く沈めば沈むほどその闇が暗ければ暗いほど彼の目はその光を一層強く捉えたのではないか。

2. 内部知覚について

「内部知覚について」が書かれたのは翌 1924 年のことである。「内部知覚について」は我々が「知る」とはどういうことか。ということについてマイノングの内部知覚の分析やアリストテレスの主語となって述語となることなき個物の考を用いて考えられたものである。『善の研究』において「意識現象が唯一の实在である。」と云った西田が此処では個物という概念を用いて、知ることについて考えているのである。

例えば、「この花は赤い」という例文によって考えてみたい。私の前に赤い花がある。私はこの花についていくら言葉を重ねてもおそらくこの花の真の姿を語りつくすことはできない。それは西田にとっての個物とは直覚を概念化したものに過ぎないからである。言葉を超えたものだからである。

ならば真に物を知るとは一体どういうことなのか。

实在界は思惟によって与えられるのではなく、見るとか聞くとかいふことによって与えられるのである。而して見るとか聞くとかいふことは働くことである。思惟によって真理が内在的となると考へられる如く、働くことによって实在が内在的となると考へることができる、否我が真理に帰し、我が實在に帰するのである。

我々はいつでも全然我を没し盡して、主客合一となる所に有を見るのである。

(106 頁)

私はこの花を見ている。この花は赤い。私は言葉ではなく、見る、香りを嗅ぐ、過去の赤い花の香を想起するなどの働きによってこの花を知ろうとする。そのうちその花と私は一体になる。私は赤い花で赤い花は私自身である。自己自身に同一なものとなるのである。しかし、「内部知覚に於ては知覚するものと知覚せらる物との厳密なる合一は望まれない。」(77 頁) この状態所謂主客合一の状態にあっても私は真にこの花を知らないのである。な

お「現在の極限に於て確実の極限に達するまでである。」(77 頁)

つまり「現在」は達することのできない極限概念であると同時に現在の自己も我々は知りえないならば現在意識において自己自身に同一な主客合一状態にある物も真に「知る」ことができないのである。しかし、

現在の我は対象として知ることはできないが、働く我として我は直に我を知ることができるのである。現在と云ふのは時の連続に於ける一つの極限点である。極限点の認識は立場の超越によらねばならぬ。作用が作用自身を知ることによって可能となるのである。(80 頁)

つまり、真に物を知る場合に於て我々は働く我として物を知る。しかし、尚働く我以上の立場に立たねばならない。そこに立場の超越がなければならぬのである。働く我から知る我への立場の超越、作用が作用自身を知る立場にいかねばならない。これは「自分の中に自分を寫す」(128 頁)ということによって可能となる。

すべて知るといふことは、自己の中に自己を映すといふことである。自己が自己自身を見るといふことである。それが知るといふことの最も完全な形である。(132 頁)

私は自己の深い奥底に鏡を持っている。その場所に私の周りの様々な個物を寫す。私自身もそこに映っている。鏡の中の私はそれらの個物と様々な働きにより主客合一の状態となる。私も個物も自己自身に同一なものになる。私は私の背後にもまた鏡を持っている。二つの鏡は合わせ鏡となって私の前後には無限に進みゆく世界が現れる。

現在の中に無限に進み行く行先が含まれて居り、達すべからざる極限が含まれて居るといふことでなければならぬ。此点からして動くものの根柢に動かざるものがあると云ふことができる、動いて而も動かざるものがあると云ふことができる。

(128 頁)

一つ一つの鏡に映っているのは、内部知覚の立場の世界である。鏡の前の私がそれを見ている。超越がなければならぬ。鏡の前に立たなければならぬ。しかし、現在が達することのできない極限であるように、また真の自己を知ることが出来ないことと同様に私は鏡の前に立つことが出来ない。

我は真に同一なるものを知ったことはないが、同一ならざるものを知る時、既に理念として同一を知って居なければならぬ。(80 頁)

鏡の前にたとえ立つことが出来なくとも私はそれを既に知って居るのである。鏡の前の世界。真に我々が在る世界。それは「内部知覚の世界」を超えた「純我の世界」である。その世界に立った時、私は昨日生まれた子供の様に純一な眼で初めてものを見ることができるのである。

3. 「美と善」から見る立場の超越について

以上、「内部知覚について」において物を知るということについて考えてきた。次に「内部知覚について」にもあったが、「立場の超越」ということについて、同時期に書かれた「美と善」という作品を参考に考えてみたい。『善の研究』でもあったように西田が画家の創造

活動についていうとき、それは核心に迫る時であり、特に大切なことを言わんとするときである。この作品は前述したように同時期に書かれた物であり、「内部知覚について」とその意図する所を同じくすると考え、ここで同様に「この花は赤い」という例文を用いて「立場の超越」といわれることについて考えてみたいと思う。

此処に花がある。赤い花である。この花は赤い。画家は白いキャンバスにその赤い花を描いている。画家はその赤い花をある直観を以て描いている。それは赤い花そのものではない。画家がいくら色を重ねても赤い花そのものにはなり得ない。しかし、画家は始終ある知的直観によってそれを描く。

芸術家が昨日の作品を取って再びこれを続ける時、時を超越する芸術的理念が働いているのである。其間の時間は全く失はれなければならぬ。(※8)

画家は次の日もその赤い花を描くだろう。そこには時を超越した知的直観、超越的意志がはたらいっているのである。その時「筆の先に眼がある」という。西田が好んでこの例を用いるのは我々の生きることそのものを画家の創造作用に見ているからである。画家がある知的直観を以て赤い花を描くとき、それは我々が常に物を見たり、聞いたり、考えたり、感じたりそういう働きのなかで日々生きていることを表す。それは円環であり、在る一定の方向に体系的に発展するものである。

我々が昨日の生活を今日も続ける時、昨日の我は今日の我につづき、昨日の世界は直に今日の世界につづく、此の我は昨日の我であり、此の室は昨日の室である。我々は之を証明する何物をも持たない。(※8)

我々はこの終わりなき円環の中にいながらしかし昨日の我が今日の我に続くということを経験して居るのである。それはなお「内部知覚の立場」つまり「純粹経験の立場」において知られるのではない。それらを超えた「真にすべての立場を除去した純我の世界」において知られるのである。その「真にすべての立場を除去した純我の世界」において我々の眼は常にある一定のものを見続けている。赤い花がそこにある。赤い花は完成することなき画家の絵と同様であり、到達することのできない世界である。我々はそこに到達することはできない。「現実は何時でも不完全たるを免れない。」しかしその花があることを我々は既に知って居るのである。

4. 最後に

読書会の庭に蠟梅の花の咲く頃、Yさんは逝ってしまった。「愚禿親鸞」は間に合わなかった。Yさんはホスピスで壮絶狂奮の毎日を送られていたという。しかし、それは癌の痛みではなく内面の事であったという。「真の自己を考えているというそのことが既に真の自己である。」と言われたYさんはあの赤い花を見たのだろうか。

「自分の死に対しての明らかな覚悟を持つことが出来た。」と言われたYさんはあの赤い花をきっと見たのだ。赤い花は我々にとって決して逃れることのできない確実なもの「死」や「無」のようなものではなかったのか。私はそれから決して目をそらしてはならない。それらを見つめ続ける先に私は「テオリア」を生きていくことが出来るかもしれない。たとえ

それが「ほんのわずかの時しかいられない」ものであるとしても。

5. 哲学的問い

この世界は鏡のような場所に映ったものに過ぎない。という思いは西田の苦しみを救ったとも言える。『善の研究』にも「己自身を鏡となす」という記述がみられまた、最終的に「超越」に至るその過程は『善の研究』に似ているとも思う。「場所」という言葉が初めて使われた『内部知覚について』と『善の研究』にはどのような変化がみられるのだろうか。

【参考文献】

- ※1 田辺元全集 第二巻 日報 3 頁
- ※2 西田幾多郎旧全集 第12巻 435 頁～436 頁
- ※3 鈴木大拙全集 2 8 520 頁～521 頁
- ※4 西田幾多郎全集 第18巻 101 頁
- ※5 西田幾多郎の憂鬱 67 頁 小林敏明著 岩波書店
- ※6 西田幾多郎旧全集 第17巻 400 頁
- ※7 脳はいかにして神を見るか アンドリューニューバーグ著 茂木健一郎訳 PHP 出版
- ※8 西田幾多郎全集 第3巻 186 頁